

【『琅』三十二号・あとがき】

☆本号の「あとがき」を記すに先だつて、先号の刊行に關し、お詫びしなければならぬことがある。それは、ゆとろ満氏の小説「彼岸花」に關して、旧原稿とそれに加筆修正された新原稿とを取り違えて編集し、発行してしまつたことである。発行後、ゆとろ氏からのご指摘で気づいた次第である。ひとえに編集者の未熟さ故の遺漏であり、ゆとろ氏にはもちろんのこと多くの読者に多大なご迷惑をおかけすることになつてしまつたこと、この場をお借りしてお詫び申し上げる次第である。

なを、修正稿については、現在中断している本号のウェブ公開をいづれ再開したいと考えており、そこでお詫みいただけるようにしたい。準備が整うまで、今しばらくお待ちいただきたい。

☆新年度が始まつた。全くの私事であるが、非常勤講師を勤めている大学の授業で、積年の疑問が解消されるような情報を得たので、それを紹介したい。

授業のテーマは「思いやりの心理」。困っている人を見たら助けなければならぬとは、子どもの頃から言われてきたことであるが、なかなかそうできないでいることは、誰もが経験してきたことである。そこで、学生たちに電車で席を譲らなくてほ・ほ・ほと思ひながら、そうできなかつた経験について、簡単なレポートを求めたのである。

ほぼ全員が、相手に気づき、躊躇し、近くの誰かの善意を期待するも、誰も動かさず、気まづい時間を過ごしたことを経験しており、その際のさまざま理由を記している。疲れてきた、眠かつたという、ストレートな理由を記す者も少なくなかつたが、圧倒的に多かつたのが、「以前に席を譲つたときに、それほど年寄りではないと断られた、

怒鳴られた（あるいは、そういう場面を見た、そういう話を聞いた）」というものであつた。そこに、「そう言われたら嫌だから」というものまで含めると、譲らない理由のほとんどがここに入る。

個人的には、それほどあからさまな拒否をされたことがないので、学生たちは、適切な年齢の人物と声をかけるタイミングを選んだのだからかと思わなくもないが、譲らない（譲れない）という判断の背景には、彼らなりの屈折した思いが存在することも事実のようだ。その根底にあるのが、衆人環視のなかで断られたら恥ずかしいという羞恥の予期であり、相当ではない人に譲つてしまつたとしたら申し訳ないという非礼のおそれなのである。

以前から気になつていたのは、黙つて席を立ち、その場から無愛想に（と私には見えるのだが）立ち去つて行く若者の姿である。どうして、会釈の一つ、「どうぞ」の一声がないのだろうと疑問に思つていたのである。彼らのそうした振る舞いは、「私が席を立つのは、貴方を高齢者と認めたからではないのです。座るか座らないかは、ご自身でお決めください」と、相手に判断を委ねた結果なのだといふことが分かつてきた。それは若者なりの「思いやり」の示し方ということになるらしいのだが、そのようにして空いた座席を前に、高齢者は戸惑うことになる。（茂治）

（次号原稿締め切り日） 二〇一七年九月末日

『琅』三十二号 二〇一七年五月 発行

編集・発行人 松村 茂治

発行所 252-0143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-19

「琅の会」・TEL(〇四二二七七三二一五九二七)

印刷所 株式会社ポプルス